

朝鮮学会

第71回大会要項

オンライン開催

2020年10月4日(日)

2020年度 第71回朝鮮学会大会プログラム

1. 日 時：2020年10月4日（日）
2. 開催方法：オンライン開催 [ZOOM（ズーム）使用]
3. 大会プログラム

10月3日（土）に予定しておりました、公開講演（福井玲先生 [東京大学] 「再発見された小倉進平の卒業論文について」、申東昕先生 [建国大学校] 「韓国の文学治療学における内面叙事透視と処方 の原理と実際」）は、COVID-19の影響により中止となりました。講演予定であった内容につきましては今後特別に『朝鮮学報』にご寄稿頂く予定です。

10月4日（日）

- 1) 研究発表会：10:00～
- 2) 総 会：13:00～（ZOOM 使用）
- 3) 研究発表会：14:00～

《(院)は大学院生》

◆第1部門：語学分野

1. 10:00～10:30

中国延辺朝鮮語における非前舌母音 / ㅊ, ㅌ, ㅍ, ㅍ / の実験音声学的研究

東京大学（院） 許 秦

2. 10:40～11:10

韓国地名における「말（馬）」関連地名の分布について

— 語頭音節における「ㄹ」の消滅と関連して—

北海商科大学 水野俊平

3. 11:20～11:50

朝鮮語の禁止表現における仮定形式と補助動詞 ‘말다’ の対照

— 表現の違いと行為要求の強さの関係について—

関西大学（院） 飯田華子

〈昼食 12:00～13:00〉

4. 14:00～14:30

韓国語語頭平音の有・無声に関する研究

— 日本語母語話者の認知実験の結果を中心に—

東国大学校（院） 平田絵未

5. 14:40～15:10

高句麗人名の中の純高句麗語

東京大学（院） 梁 紅梅

◆第2部門：文学分野

1. 10:00～10:30

在日朝鮮人詩人金時鐘の『光州詩片』（1983）に投影された済州4・3の記憶

立命館大学（院） 岡崎享子

2. 10:30 ~ 11:00

金素雲「朝鮮郷土叢書」の企図 — 『三韓昔がたり』『朝鮮史譚』『黄ろい牛と黒い牛』を中心に—

同志社大学（院） 中井裕子

3. 11:00 ~ 11:30

母性神話と民族への回帰 — 宗秋月の「猪飼野のんき眼鏡」(1987) を中心に—

名古屋大学（院） 朴 成 柱

4. 11:30 ~ 12:00

金億とフランス現代詩の星座図（planisphere） — 『懊悩の舞踏』の底本研究（四） —

延世大学校 具 仁 謨

<昼食 12:00 ~ 13:00>

5. 14:00 ~ 14:30

譲原昌子のサハリン体験と「朝鮮ヤキ」

国民大学校 徐 在 吉

6. 14:30 ~ 15:00

尹東柱と日本人詩人の文学的關係 — 三好達治を中心に—

東京外国語大学（院） 金 雪 梅

7. 15:00 ~ 15:30

朝鮮古典文学と儒教

近畿大学 山田恭子

◆第3部門：歴史学・文化人類学・その他の分野

1. 10:00 ~ 10:30

高句麗王系整備と美川王

京都府立大学 井上直樹

2. 10:30 ~ 11:00

ソウルにおける村祭り（マウル・クッ）の現況と日韓比較研究の可能性

名古屋大学 浮葉正親

3. 11:00 ~ 11:30

海峡都市・下関市における在日コリアンの生活世界

天理大学 魯ゼウォン

4. 11:30 ~ 12:00

韓国のマウルづくりとローカル・コミュニティの再編成 — 南原地域の事例から —

東京大学 本 田 洋

〒 632 - 8510 奈良県天理市杣之内町 1050 天理大学内

Tel.0743-63-9060 / Fax.0743-62-1965

<https://chosengakkai.sakura.ne.jp/>

chosen@sta.tenri-u.ac.jp

朝 鮮 学 会

1. 中国延辺朝鮮語における非前舌母音 / ㅓ, ㅜ, ㅗ, ㅡ / の実験音声学的研究

東京大学(院) 許 秦

本研究は現在中国延辺朝鮮族自治州で使われる朝鮮語の単母音 / ㅓ, ㅜ, ㅗ, ㅡ / を対象に、実験音声学的な方法を用い、その音響特徴を明らかにすることを目的とする。延辺朝鮮語の音韻論的研究に関しては、アクセント研究が比較的多い。咸鏡道方言を基盤としている延辺朝鮮語は、現在のソウル方言では失われているアクセント体系を保っているため、アクセント研究が音韻研究の主な対象になってきた。しかし、延辺朝鮮語のアクセント以外の音韻的特徴を対象に行った研究は未だ不十分である。特に、精密且つ科学的な音響分析を伴う実験音声学的研究はほとんど行われていない。従って、延辺朝鮮語の音韻体系を可視的に捉えるための研究が必要であると言える。

母音 / ㅓ, ㅜ, ㅗ, ㅡ / の音価に関する研究はソウル方言を始め、韓国内の他方言を対象としても行われてきたが、方言の違いによって、一部の音価が異なったり、一つの方言内でも世代差、性別差などによる音価の違いがみられると報告されている。従って、絶えず議論されているこれらの母音が、世代差、性別差、環境の違いなどによって、如何なる音響的特徴を示しているのかを、具体的に考察する必要がある。筆者は以上のことを明らかにするため、延辺朝鮮語話者から録音資料を録り、それに対する音響分析を実施した後、統計学の方法を用い、得られた結果について科学的な説明を行う。

その結果は以下のようにまとめられる。男性の場合母音 / ㅡ / は後舌母音であり、同じ後舌母音である母音 / ㅗ / とは、主に円唇性の有無により区別される。女性の場合、母音 / ㅓ / が後舌母音であり、同じ後舌母音である母音 / ㅜ / とは、開口度による区別も存在するものの、主に円唇性の有無により区別される。非前舌母音間の距離において、男性の場合は / ㅓ / と / ㅡ /、及び / ㅜ / と / ㅗ / の縦の関係にある両母音間の距離が短く、女性の場合は / ㅓ / と / ㅡ / の横の関係にある両母音の距離が短い。また、これらの非前舌母音のフォルマント周波数の値、及び母音間の距離は、年齢と明確な対応関係を見せていない。唯一、女性の母音 / ㅓ / の F1 の値のみで、若い程その値が高く現れる傾向が見られるが、更なる検証が必要であると思われる。更に、第2音節で、男性の母音 / ㅜ / と女性の母音 / ㅓ / において、母音の弱化現象が確認できる。男性の場合、母音 / ㅜ / の F2 の値が高くなり、女性の場合、母音 / ㅓ / の F2 の値が高く現れる。最後に、先行する子音の違いによる母音 / ㅓ / の音価を検討したが、先行子音が両唇音の場合、母音 / ㅓ / の開口度が小さく、有気音と歯槽摩擦音の場合、開口度が大きく実現され、同じく先行子音が両唇音の場合母音 / ㅓ / の前舌性が弱く、歯茎音と硬口蓋音の場合前舌性が強く実現される。

2. 韓国地名における「말 (馬)」関連地名の分布について —語頭音節における「ㄱ」の消滅と関連して—

北海商科大学 水野俊平

朝鮮語における「ㄱ (아래아)」の消滅は、まず16世紀後半に第二音節以下のものから始まり(第一段階消失)、18世紀初めから中葉にかけて第一(語頭)音節のものに及んだ(第二段階消失)というのが定説である。第一段階での消滅は「ㄱ→一」「ㄱ→ㅏ」という変化を見せ、第二段階での消失は「ㄱ→ㅓ」という変化を見せている。これらの変化の様相は主に文献資料によって把握されたもので、方言調査によって把握された変化の様相とは多少差がある。方言調査の結果によると、多くの地域で語頭音節の「ㄱ」が「ㅓ」に変化した例が見られるが、「ㄱ」が「ㅏ」に変化した地域も少なくない。

中期朝鮮語における「ㄱ」が現代朝鮮語の「ㅓ」と対応する例は韓国全土にわたって見られる。しかし、方言調査の結果、第一音節において唇音の後にあらわれる「ㄱ」の場合には、京畿・江原・忠北・忠南・慶北など韓国の中部・東部では「ㅓ」と対応し、全北・全南・慶南などでは「ㅏ」と対応することが明らかになっている。本稿で考察の対象となる「말 (馬)」の場合も、全北・全南・慶南などでは「말」であらわれる。また、1910年～20年代の方言調査(小倉進平『朝鮮語方言の研究』)と、1980年～1990年代の方言調査(精神文化研究院『韓国方言資料集』)を対照した結果、語頭音節で「ㄱ→ㅏ」という変化を経たと見られる例の分布に差が生じていることが知られている。例えば、後者の調査結果では「말」の分布は全南に限られているが、前者の調査では「말」が全北南部・慶南西部にも分布している。同様の現象は「파리」「팔」などの例でも確認されている。このことから、第一音節において唇音の後にあらわれる「ㄱ」は、中部・東部では「ㅓ(말)」に変化し、全北・全南・慶南においては「ㅏ(말)」に変化した後、「ㅓ(말)」が改新形として勢力を拡大し、「ㅏ(말)」の地域を侵食したものと考えられている。

以上の成果は文献資料や方言に対する研究から得られた成果である。本発表では、韓国における「말(馬)関連地名」の分布を明らかにし、その分布を通して、語頭音節における「ㄱ (아래아)」の消失様相を考察することを目的とする。

朝鮮半島には数多くの「말 (馬) 関連地名」が分布しており、その多くが岩石名(말바위など)、峠名(말치など)、山岳名(말피など)である。これらの「말 (馬) 関連地名」の分布はハングル学会『韓国地名総覧』などの地名資料によって把握でき、方言資料よりも語形の類型・分布の様相・改新形の浸食などを精緻に把握することができる。

本発表では『韓国地名総覧』のデータベースをもとに、「말 (馬) 関連地名」に含まれる「말」「말」の分布を明らかにした。その結果、「말」が含まれた地名は、方言調査で得られた分布範囲よりも広く分布しており、その分布は全北の北部、慶南の南西部、済州島の北部にまで及んでいることが明らかになった。これは、かつて朝鮮半島南部において、第一音節・唇音の後という環境で、「ㄱ→ㅏ」という変化が広くあらわれたことを示すものである。また済州島における分布は、朝鮮半島南部における「말」が改新形として波及した可能性を示唆するものである。ただし、「말」が分布している地域でも「말」が含まれた地名が散在しており、複数地名(地名の多重現象)などを通して、改新形としての「말」の波及・浸食が進んでいることがわかる。

3. 朝鮮語の禁止表現における假定形式と補助動詞 ‘말다’ の対照 —表現の違いと行為要求の強さの関係について—

関西大学(院) 飯田華子

本発表は、朝鮮語の禁止表現における假定形式(- (으) 면)を使用した表現(以下例文 a)と、補助動詞‘말다’を使用した表現(以下例文 b)を対象に、それぞれ行為要求の強さに焦点を当て、語用論的側面から対照することを目的とする。

例) a. 밥을 남기면 안 돼요.
b. 밥을 남기지 마세요.

禁止表現は、否定表現(‘안’否定文、‘못’否定文、‘말’否定文)の中の一つとするのが一般的である。しかし、実際の会話で使用される禁止表現は、補助動詞‘말다’を使った表現のみではない。これまで禁止表現を否定表現とは切り離して一つの文法範疇として確立させようとした先行研究者は、補助動詞‘말다’を使った表現以外の禁止の意味をもつ形式を挙げて研究を行ってきた。김영란(1998)、김영란(1999)、이은희(2013)等では、禁止表現として補助動詞‘말다’以外の表現(-ㄴ / 을 수 없-, 허락 안 하-等)を提示した。その中でも이은희(2013)は、‘안-(으)면 좋겠다’や‘-(으)면 안 되다’等の文型を挙げて、假定形式(- (으) 면)を使用した禁止表現における婉曲性を明らかにした。本発表ではこのように婉曲的に禁止を表現することができる假定形式(- (으) 면)を使用した表現を取り出して考察を行う。

假定形式を使用した禁止表現は、‘안-(으)면 좋겠다’や‘-(으)면 안 되다’のように一つのイディオムのように扱った研究が主である。韓国語教育においても、これを一つの文型として教えている場合が多い。しかし、実際に現代韓国語において、これらは完全に文法化したものではなく、多様な表現(‘안 되다’を‘되겠니?’等)に置き換えることで、相手に対する行為要求の強さを調節しながら禁止を表現することが可能である。

まず本考察では、假定形式(- (으) 면)を使用した禁止表現が実際にどのような統語的環境で使われているのかを考察するため、現代語口語コーパスから該当する例文を抽出した。そして、①否定を表す‘안’について、②‘-(으)면’に先行する現在形語尾と過去形語尾について、③‘-(으)면’を使用した際の文の種類について、以上のような観点から、話者と聴者の関係、文のスピーチレベルを基準に、各表現の行為要求の強さを示した。この時、行為要求の強さを示す際に、一般的な禁止表現として挙げられる補助動詞‘말다’を使用した表現と対照しながらその程度を示した。

これらの考察により、韓国語における禁止表現は、‘안-(으)면 좋겠다’や‘-(으)면 안 되다’等のイディオム的に扱われてきた以外の構文が存在することがわかり、それらには話者の行為要求の強さの調節が影響していることがわかった。

4. 韓国語語頭平音の有・無声に関する研究 —日本語母語話者の認知実験の結果を中心に—

東国大学校（院） 平 田 絵 未

韓国語の音韻体系において、子音 / ㄹ /, / ㄴ /, / ㄷ /, / ㅌ /, / ㅍ /, / ㅃ /, / ㅆ / は音韻論的に初声の位置では無声音として扱われる。この音韻規則に従い、日本で発行されている韓国語教材では語頭の平音はアルファベット或いは IPA 記号を用いて無声音として記述される。ところがここで問題となるのが、日本語母語話者（以降「日本語話者」）にとって、語頭平音が時として有声音、つまり濁音として知覚される場合があるという事実だ。

そこで、本論文では日本語話者が韓国語の語頭平音を無声音だけでなく有声音として認知するケースがあることを実験によって確認し、提示された音を無声音・有声音のどちらか一方に知覚させる要因がどこにあるのかを音韻論的、音響音声学的側面から明らかにすることを目的としている。

認知実験は韓国語話者 2 名の発話を基に作成した 112 個の刺激音を用いて、日本語話者 141 名を対象に 4 度に渡って認知実験を行った。参加者には、聞き取った各刺激音の有声性の程度を尺度点数 '0' から '7' までの 8 段階で評価させた。この実験で得られた回答数は計 59,024 個（発話者 A に対する回答 29,680 個、発話者 B に対する回答 29,344 個）であり、そこから導き出された尺度点数の平均値は 2.05 点であった。次に、これらの実験結果を踏まえた上で、考察対象を尺度点数の平均値が上位から 10 位までに入る音節と、最下位から 10 位までに入る音節に限定して音韻論的側面からの比較分析を行い、音響音声学的な側面からも同様に分析検討してみた。

音韻論的な側面からの分析の結果、日本語話者に有声音として知覚されやすい傾向として、語頭平音の音節の母音が円唇後舌高母音であること、無声音に知覚されやすい音節の傾向として平唇前舌低母音であることと結論付けることができた。

音響音声学的な側面からの分析の結果、日本語話者と語頭平音の有声性知覚の関係性に最も強く影響している音響音声学的な要因は VOT であったと結論づけることができた。

日本語話者のための発音教育に関する研究はその殆どが激音と濃音の習得に関するもので、語頭平音についてはこれまで扱われてこなかった。しかしながら、今回の実験と分析を通して語頭平音に対する日本語話者の知覚に無声音と有声音が混在していることが統計的に可視化され、日本語を母語とする韓国語学習者にとって「語頭平音は無声音である」という単純な指示だけにとどまっていたのは混乱をもたらすということがわかった。語頭平音の習得に関しては、こうした日本語話者の認知の傾向を踏まえた上で新たな習得方法を模索していくことが肝要となってくるだろう。

5. 高句麗人名の中の純高句麗語

東京大学(院) 梁 紅 梅

1. 研究の目的

筆者は昨年の朝鮮学会の発表で高句麗国の人名が高句麗の固有語である可能性が高いことを指摘し、その漢字の音価を検討した。前回の研究成果を踏まえて本論文では人名データの中の純高句麗語を抽出し、もっと正確に高句麗の固有語を探し出すことを目的とする。兪昌均(1991)を代表とする先行研究では年代などに基づいて広開土王時代までを純高句麗語、それ以降は漢文化を受け入れた名前としたが、このような分け方はあまりにも概略し過ぎると言える。実際に一つ一つの人名を分析してみると、使われた漢字、音韻、経緯なども含めもっと多くの事実を見つけることができた。

2. 研究方法

最も重要なのは名前にかかわる歴史事件、出現頻度、意味や氏、夫人などの名称の付け方、苗字の付け方などすべてのデータを集めて綿密に検討することだと言える。本稿では主に『三国史記』と『日本書紀』に現れた高句麗人名データを基にまた井上秀雄(1983)の訳注も参考にし、個々の人物にかかわるすべてのでき事を探しだし、その名前が固有語に分類できる可能性を検討した。例えば『三国史記』で王妃は姓+氏のように記録されて、一見苗字に見えるが、掾氏、于氏、松氏などは部族の名前から或いは父親の名前から一文字取った場合が多い。松讓の娘だから松氏、掾那部だから掾氏になったとみることができる。山上王の小后が部族の族姓を失ったという記事もあるが恐らく王妃の呼び方は記録上の問題としてみて、掾と于、松は研究範囲に入れるべきである。ただ、瑠璃明王の妃の雉姫ははっきり漢人だと書いてあるので検討から外すことになる。

3. 結論

- ① 苗字に関しては『三国史記』では王が臣下に苗字を与える場面が多く、高句麗人は特に苗字を持たず、恐らく漢文化の影響で一つの賞美として与えられたことが推測できる。
- ② 意味がわかるものは善射為朱蒙、呼相似為位故名位宮などいくつかある。位宮は位が似ているという意味、宮が先祖の名前なので文法的にはVO型になる。位が使われたもう一つの名前は東川王の諱の憂位居だが意味ははっきりわからない。
- ③ 出現頻度が多いものは明臨於漱の中の於漱と明臨がある。於漱は2回、違う字体の于素として一回現れ、明臨も明臨答夫と明臨笏親尚がある。明臨答夫は明臨を省略した語形もある。また劉屋句と松屋句も似ているが、意味解釈はまだ難しい。
- ④ 王後の全名は一回も記録されたことがなく、部族の名前から或いは父親の名前から一文字を取ってそこに氏を付けた形で書かれているので固有語に入れられる。ただはっきり漢人だとわかる雉姫は検討から外す。
- ⑤ 解夫妻などに使われた解に関しては井上などの解説より韓国語の訃にあたる太陽の意味だと推測できる。
- ⑥ 泉蓋蘇文が『日本書紀』ではいりかすみに対応するのは有名な話である。

参考文献

井上秀雄訳注(1983) 三国史記 平凡社

兪昌均 (1991) 삼국시대의 漢字音 民音社

1. 在日朝鮮人詩人金時鐘の『光州詩片』(1983)に 投影された済州4・3の記憶

立命館大学(院) 岡崎享子

金時鐘(1929-)は在日朝鮮人一世であり、日本語で文学活動を行っている詩人である。1945年8月の朝鮮解放の後、1948年に勃発した済州4・3事件(以下、済州4・3)¹⁾の中で、彼は南朝鮮労働党の一員であったことから、追われる身となり日本へ渡った。金時鐘にとって済州4・3とは、彼の生涯における重要事項であると同時に、文学作品の重要な主題であるといえる。

1980年に韓国の光州で起こった民主化運動(以下、光州5・18)²⁾を受け、金時鐘は、3年後の1983年に光州5・18を題材にした詩集『光州詩片』(1983)を発表した。『光州詩片』は、済州4・3を体験した金時鐘が、同じく国家権力に対する闘争であった光州5・18を間接的に体験したことによって編んだ詩集である。金時鐘にとって光州5・18を体験するという行為は、済州4・3を再び体験するという行為でもあった。したがって、本発表では、『光州詩片』において、金時鐘が光州5・18を通して済州4・3をどのように描いたのか、また済州4・3を体験した在日朝鮮人として光州5・18をどのように受け止め、どのように呼応したのかについて明らかにすることを目的とする。

作品分析では、『光州詩片』の中から済州4・3と関係性が深い「褪せる時のなか」、「遠雷」、「冥福を祈るな」を取り上げる。「褪せる時のなか」には、在日することで光州5・18に直接参与できなかった不在性が描かれている。「遠雷」には、金時鐘の済州4・3の直接的体験と光州5・18の間接的体験が同時に描かれている。「冥福を祈るな」には、金時鐘が済州4・3の中で目撃したと考えられる死体の描写があり、それが光州5・18の被害者として描かれている。以上のように、本発表では、済州4・3に焦点を当てながら『光州詩片』の作品を分析することによって、金時鐘にとっての光州5・18、さらには光州5・18と済州4・3との関連性を明らかにする。

<参考文献>

金時鐘『光州詩片』構造社、1983年

金時鐘『朝鮮と日本に生きる—済州島から猪飼野へ』岩波書店、2015年

1) 「四・三特別法真相究明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」によれば、済州4・3とは“1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで済州島で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件”であるとされており、犠牲者の数は2万5千人から3万人と推測されている。(『済州4・3事件真相調査報告書』済州4・3真相究明及び名誉回復委員会、2003年、584頁。)

2) 5・18民主化運動とは、1979年の朴正熙軍事政権に対するクーデターにより新たに誕生した全斗煥を代表する新軍部の政権獲得の過程において、新軍部の誕生に反発した光州の市民たちが1980年5月18日に起こした民主化運動と、それに対する新軍部側による鎮圧作戦の実施(1980年5月27日まで)を指す(『5・18民主化運動』光州広域市5・18史料編纂委員会、2018年12月)。

2. 金素雲「朝鮮郷土叢書」の企図 — 『三韓昔がたり』『朝鮮史譚』『黄ろい牛と黒い牛』を中心に —

同志社大学(院) 中井裕子

本発表では、金素雲が朝鮮の史話・昔話の日本語翻訳を試みた「朝鮮郷土叢書」五作のうち史話三作について考察する。それを通して、戦時体制期の1940～1943年ごろの植民地朝鮮の文化状況と、当時の出版状況、金素雲が「郷土叢書」を企図した目的、それぞれの書籍にそれがどのように垣間見えるかを、モチーフや叙述、視覚資料などの分析を通して考察する。

1. 検討する書籍

鐵甚平『三韓昔がたり』 1942(S17)年4月25日発行 学習社 65銭
金素雲『朝鮮史譚』初版 1943(S18)年1月1日発行 天祐書房 2圓
金素雲『朝鮮史譚』増補版 1943(S18)年8月5日発行 天祐書房 2圓
鐵甚平『黄ろい牛と黒い牛』1943(S18)年5月25日発行 天祐書房 2圓65銭

以後『三韓』、『史譚』、『黄』と略記

2. 時代背景

1937年の日中戦争勃発後、植民地朝鮮は戦時体制下に入り、物的人的兵站基地化していく。それと同時に、国内外の新聞や雑誌は出版法・新聞紙法下の厳しい検閲下に置かれ始める。学校では朝鮮語の授業がなくなり、「国語常用」政策によって皇民化政策が進む一方、郷土色強調政策の下、説話は民俗学の対象ともされ、「野談ブーム」も起こっていた。

3. 掲載作品の分析

*『三韓』には、新羅・百済・高句麗の建国から滅亡、甄萱や弓裔の逸話全44話が主に『三国史記』『三国遺事』に材を取って収められている。

*『史譚』には、高麗の建国から滅亡、李氏朝鮮の建国から滅亡まで全17話が収められている。初版では15世紀までの15話しか書けなかったため、7か月後に2話を加筆して李朝滅亡までの逸話を収めきっている。

*『黄』には、高麗5話、李朝16話、不明4話、計25話が収められている。児童を読者対象にしており、『史譚』には現れない民衆や商人、女性や子供の逸話が多く選ばれている。「金弘道」や「金正浩」なども紹介されている。

4. 視覚資料と協力者

『三韓』の装幀・挿絵は岡村不二男で、東京美術学校で藤島武二の下で学んでいる。また、遺跡や遺物の写真を提供しているのは、総督府博物館慶州分館に勤務していた大坂金太郎である。2枚の絵画も挿入されているが、それは解放後北に渡った李如星の作である。『史譚』には挿絵はないが、美粧箱では金弘道の「闘犬図」、表紙に馬牌、見返しには金弘道の風俗画が用いられている。

『黄』の挿絵は高野喆史で、合間に17編の童謡が紹介されている。

5. 金素雲の翻訳の意図

当時の朝鮮人社会の中で、「皇民化」政策によって民族性を喪失する危機感が高かった。史譚・昔話をせめて日本語でも残そうとした金素雲の一つの「抵抗」の形が読み取れるのではないかと考えている。

3. 母性神話と民族への回帰 —宗秋月の「猪飼野のんき眼鏡」(1987)を中心に—

名古屋大学(院) 朴 成 柱

ポストコロニアル理論の術語であるサバルタンは、単に被抑圧者や、社会のマイノリティー、パイの分け前にあずかれない誰かを指す上等な言葉ではない。ヘゲモニーへの接近が拒まれているものを指す用語である(スピヴァク 1998:1-29)。サバルタンは常に舞台の中心から離れており、排除されてきた。民族差別と家父長制によって、二重に差別を受けてきた在日朝鮮人女性はそれに当てはまる。

在日朝鮮人女性は、植民地支配からの解放後も見えない存在であった。特に、「在日一世の女性たちには苦難の歴史と苛酷な生活という幾重もの足かせがはめられていた。その足かせによって彼女たちは、自らの言葉で自己を表現することが不可能となり、自らを語れぬまま一世世代の時代は終わりを迎えたのである」(金堯我 2004:29)。彼女たちはまさにサバルタンであり、二重の植民地化の象徴ともいえよう。その象徴性は、文学を書く主体という観点においてもそのまま表れていた。そのため、これまで在日朝鮮人文学に描かれた女性像に対する議論も、男性像(主に、父親像)に対する議論に比べ、微々たるものであった。

多くの作家の作品では、男性の視点で語られる女性の姿が在日朝鮮人の典型的な女性像として認識されてきた。例えば、李恢成(1935-)は家族を支える理想的な母親の姿を描き、金鶴泳(1938-1985)は夫に抑圧される従順な妻の姿を描いている。これは、在日朝鮮人文学が基本的に男性の視点から出発したこと(磯貝 2015:19-20)によるものであり、女性の視点から女性像を形象化する機会が少なかったからだと考えられる。

本発表では、民族差別と家父長制によって二重に差別されてきた在日朝鮮人女性が、文学においても、いかに差別の構造に置かれていたかを分析し、その当事者¹⁾として作品活動をしてきた宗秋月(1944-2011)の作品に注目することで、在日朝鮮人女性の生き方について検討する。

【参考文献】

- ・宗秋月(1984)『猪飼野・女・愛・うた』ブレーンセンター
- ・G・C・スピヴァク(1998)『サバルタンは語るができるか』(上村忠男 訳)みすず書房
- ・金堯我(2004)『在日朝鮮人女性文学論』作品社
- ・磯貝治良(2015)『<在日>文学の変容と継承』新幹社
- ・飯田祐子(2016)『彼女たちの文学—語りにくさと読まれること—』名古屋大学出版会

1) いくら当事者とは言っても、女性作家が<女性>を代表するわけではない。例えば、飯田祐子(2016)は、既存のジェンダー研究で自明だと考えられてきた<女性>というカテゴリーに疑問を投げかける。<女性>というカテゴリーには、ジェンダーの問題のみならず、民族や階級、経済における格差、年齢などが様々に絡み合っている。<女性>が一枚岩ではないということが示すように、文学を書く主体としての「女性作家」も一律的ではなく、社会的、歴史的、文化的脈絡の中で複雑に重層化した存在である。本発表でも、このような女性の複雑性を念頭に置きつつ、宗秋月が描く女性たちの姿を分析する。

4. 金億とフランス現代詩の星座図 (planisphere) — 『懊悩の舞踏』の底本研究 (四) —

延世大学校 具 仁 謨

金億の翻訳詩集『懊悩の舞踏』(1921・1923)にはベルレーヌをはじめ、全13人のフランス詩人の63編(初版)、または72編(再版)の詩が収録されている。このなかで本篇に当たる「ベルレーヌの詩」章、「グールモンの詩」章、「サマンの詩」章、「ボードレールの詩」章、「ポールの詩」章に比して、拾遺編に当たる「懊悩の舞踏」章と「小曲」章に関する研究はほとんど行われていない。この拾遺編の全8人の19編(初版)、または18編のフランス詩はいくつかの点で興味深い。まず、シャルル・ゲラン(Charles Guérin、1873～1907)をはじめ、そのほとんどの作家が新(Neo)象徴主義、あるいはデカダン派(Décadent)・象徴派(Symboliste)の主な創作舞台だった『メルキュール・ド・フランス(Mercure de France)』誌を代表する人物だったことである。また彼らの作品は20世紀初期のフランスで出版された代表的な現代詩の詞華集(アンソロジー)である『今日の詩人(Poètes d'aujourd'hui)』(1908～1918)に収録され、現代詩の正典的な位置を占めていた。『懊悩の舞踏』所載のフランス詩に関する先行研究によると、金億のフランス詩翻訳は堀口大學の『昨日の花』(1918)をはじめ、様々な日本の翻訳詩集を底本にした重訳である。それは『懊悩の舞踏』の拾遺編の場合も同じであるが、とりわけ堀口大學の『昨日の花』と『失はれた宝玉』(1920)や生田春月(1892～1930)の『泰西名詩名訳集』(1919)が重要な底本である。とくにこれらの翻訳詩集は収録作品だけではなく、その構成の面まで『懊悩の舞踏』に決定的な影響を及ぼした。かかる事情を踏まえて、本論では拾遺編のフランス詩の底本はもちろん、フランスのデカダン派と象徴派の詩人たちから堀口大學を経て金億に至る、東アジアにおけるフランス現代詩の受容経路を明らかにする。また金億によって再現されたフランス現代詩の星座図(planisphere)の歴史的な意義をも論じる。

5. 讓原昌子のサハリン体験と「朝鮮ヤキ」

国民大学校 徐 在 吉

本発表では、日本の外地作家の一人である讓原昌子の遺作「朝鮮ヤキ」を通して、日本人作家によって書かれた戦前の樺太朝鮮人の表象について研究する。

江戸末期、日本人の活動領域の一部となったサハリンは、日露戦争直後に北緯 50 度線を境に、ロシアとの国境に面して日本の領土に編入された。日本は新たに獲得したサハリン島の南部を「樺太」と称し、樺太庁を設置、「外地という性格が最も希薄な外地」の樺太には日本人の入植が行われた。アイヌなど先住民が少ない領土であった樺太は、「搾取投資型植民地」であった朝鮮、台湾とは違って、林業、石炭、製紙産業などを主にする「移住型植民地」へと発展するが、戦時体制に突入する 1930 年代後半からは炭鉱などで朝鮮人の労働動員が急増することになる。日本の敗戦後、ほとんどの日本人が本国に引き揚げることになるが、サハリン朝鮮人たちは朝鮮あるいは韓国に戻ってくることができず、「サハリン残留朝鮮人問題」が発生することになった。

植民地朝鮮から故郷を離れ、ロシア、満州など異郷にすんでいた移住民の場合、韓国語や居住国の言語で文学活動をするようになり、彼らの文学に関するいわばディアスポラ文学研究が活発に行われているが、サハリン朝鮮人の文学活動は、これまでほとんど注目されなかった。その中でも、戦前サハリン朝鮮人を描いた文学は皆無に近い状況である。他の地域とは異なり、サハリンの場合、ほとんど肉体労働に従事した男性労働者が動員されていたことと関連があると思われる。発表者は、2019 年に『サハリン残留』を韓国語に翻訳出版する過程で、戦前サハリンで活動した朝鮮人作家の情報は得られなかったが、サハリン朝鮮人を描いた日本の女性作家讓原昌子（1911-1948）を知るにいたった。北海道文学史あるいは樺太文学史で部分的に扱われてはいるものの、日本文学史ではほとんど忘れられている讓原昌子は、樺太で成長し、中等教育を終えた後小学校の教師として勤務しながら、樺太と内地で活発な作品活動をしていた。特に、著者の死後に発表された短編小説「朝鮮ヤキ」（1949）はサハリン居住朝鮮人の家族を本格的に扱っており注目される。

本発表では、文学的再現の空白になっていたサハリン居住朝鮮人の姿を、敗戦後に讓原昌子が記憶として新しく再構成し、文学的に再現する過程で、当面の問題として提起していた在日朝鮮人問題を取り上げる一方、敗戦日本の新たな方向性を模索しようとしたという事実を明らかにする。

6. 尹東柱と日本人詩人の文学的關係 —三好達治を中心に—

東京外国語大学(院) 金 雪 梅

本発表は尹東柱の没後に彼の親族などが証言した彼の読書歴と所蔵図書を手掛かりに、彼と日本人詩人の文学的關係について考察する。その中でも尹東柱と深い関係がある三好達治を扱う。尹東柱の所蔵図書にはわずかだが、日本書籍があり、三好達治の詩集『春の岬』、『岬千里』や三好の詩も含まれる『現代詩集』などがある。また尹は三好達治と丸山薫などが創刊した雑誌『四季』を購読し、1942年に叔父の尹永善に三好達治の『春の岬』を贈るなど、日本の詩人三好達治に対する関心が目立つ。

尹東柱の詩世界の形成にあたり、民族文学(朝鮮文学)と1930年代の日本文学及び日本語を通じた西欧文学という潮流が尹東柱の詩に影響を与えたと言われている。(大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』「尹東柱研究」、緑蔭書房、(2003)) 延禧専門学校在学中、尹東柱は「星を数える夜」(1941年)という詩に、「フランシス・ジャム」や「ライナー・マリア・リルケ」という西欧の詩人の名前を書いたが、これらの外国詩人の詩も日本語を通して接し、特にフランシス・ジャムの詩は三好の訳詩を読んだと考えられる。それは1936年に三好はフランス・ジャムの訳詩集『夜の歌』を出版し、尹東柱の所蔵図書を見ると1940年1月31日にこの詩集を購入したことからわかる。

また尹東柱が1940年に購入した創元社出版の『春の岬』という詩集は、三好の最初の詩集『測量船』と『南窓集』、『閒花集』、『山果集』の四詩集の他、「春の岬」という序詩一篇と『測量船』刊行後に書かれた未刊詩十篇を加えたものである。これは三好の詩集として当時最も多く読まれた詩集で、その中の『測量船』という詩集は、三好が1920年代から1930年代の詩壇の混乱状況の中、自由詩以後の新詩を模索し、「測量」しようとする意味で出した詩集である。そのため、三好は自身の『測量船』という詩集に対し、「しっかりとした思想の支柱がない」、「新しい詩歌の可能性を、力を尽くして模索し続けたやうに記憶している」と評価している。1930年代後半に朝鮮詩壇にあった世代論争の中で、尹東柱は三好のこのような新詩に対する試みに注目し、詩壇の混沌と孤独の中から、自身の詩の確立を求めたのではないか。三好の詩に描かれた不確かな未来への不安と新しい詩への試みは、同じく自立しようとした尹東柱に一種の模索の手がかりになったように思える。

さらに三好の初期の詩集に見られる「母」に対する思いは、尹東柱が平壤と「京城」(ソウル)に居た時の、母に対する悲しさに満ちた郷愁とも類似する。三好が母の姿を通して抱く強い郷愁は、異郷で暮らしている尹東柱に共感と慰めになったのだろう。

本発表はこれまであまり研究されていない尹東柱の詩の世界と三好達治のその関係を探り、尹東柱が三好に関心を持った理由と詩の中に現れる影響の「可能性」についても考える。もって本報告を尹東柱と1930年代の日本文学との関係に繋げる研究のスタートとしたい。

7. 朝鮮古典文学と儒教

近畿大学 山田 恭子

本研究は朝鮮古典文学と儒教の関係について、(一) 朝鮮古典における文学の概念、(二) 科挙と文学、(三) 朱子学の導入と文学、(四) 忠と文学、の側面から考察する。

(一) については、まず金思燁『朝鮮文学史』(正音社、一九四八)における「文学」の定義を挙げ、特に日本の近代以降の「文学」のそれとは全く異なることを確認する。金思燁は論語の先進篇にある「文學子游子夏」を挙げ、「文学」とは、我々が考える概念とは異なり、「経、史、詞、章」などの意味であり、「政治、倫理、歴史、文芸」を包括するものとしている。さらに『中国大文学史』(中華書局、一九一八)にある王文濡の文を引用し、周敦頤の「載道の文」などを挙げている。一方で、近年では、野崎彦彦の『慵齋叢話 - 十五世紀朝鮮奇譚の世界』(集英社、二〇二〇)に、高橋亨「朝鮮近代文学ノート講本第一冊」の「内容のいかんにかかわらず文章表現として優れたものはすべて文学と見做す」という内容があり、これについても言及する。

(二) について、儒教と文学の関係を考えるうえで不可欠な要素である科挙について述べる。科挙は漢字を媒体に文を広めるのに大きな役割を果たしたといえる。新羅では六八二年に儒教的国家教育機関である国学を設置、七八八年には科挙の前身である読書三品科が成立した。そして、高麗時代、光宗(九二五～九七五)の王権強化によって、後周からの帰化人である雙翼(未詳～九七五)が登用され、九五八年に科挙制度が実施された。朝鮮古典文学の大半が文人すなわち儒者による漢詩文であることを鑑みれば、実際の文学創作に科挙が果たした役割は大きい。

(三) については、まず安珣(一二四三～一三〇六)、白頤正(一二六〇～一三四〇)、李斎賢(一二八七～一三六七)、李穡(一三二八～一三九六)などによって本格的な朱子学の受容が始まったことを述べる。つまるところ、元の官僚を通じて中国の朱子学が受容されたといえよう。特に權溥(一二六二～一三四六)は『四書集註』の刊行を行い、朱子学の伝播に貢献した人物である。李仁老『銀台集』二十巻の注釈をおこない、息子の權準、婿の李齊賢とともに歴代の孝子六四名の行蹟を称えた『孝行録』を編纂した。また道学の隆盛と共に、貴族から士大夫へ、政治的中枢層が移行していき、その文学も儒教的徳目を掲げるものが多くなった。

(四) について、朝鮮古典文学は王に対する忠を表した文学作品が多い。その嚆矢は薛聰の『花王戒』であり、王への諫言を寓話で記したものであるが、その内容は王に対する忠誠心を表すものであり、その伝統は朝鮮時代の仮伝体小説として脈を保っていった。權輿『花史』、李頤淳『花王伝』などがその例である。そのほかに詩歌においては「君恋歌辞」として表わされた。また『天君伝』『天君小説』も同様に、儒教的影響のもとに作られた作品である。そもそも朝鮮古典文学は忠・孝・烈を表した作品が多いが、「忠」は特にその核心をなしており、朝鮮古典文学を考えるうえで重要なモチーフとなっている。

1. 高句麗王系整備と美川王

京都府立大学 井上直樹

高句麗史の基本的枠組である高句麗の王系については、これまで多くの研究者によって論及されてきた。それは、『三国史記』高句麗本紀が伝える高句麗王系が、『広開土王碑』に刻記されたそれと必ずしも一致していないためでもあった。すなわち、高句麗本紀が広開土王を第19代の王とするのに対して、『広開土王碑』は広開土王を「一七世孫」と記し、相違し、それをどのように理解すべきかが、高句麗史研究上の課題の一つとなってきたからである。

いずれかが5世紀の高句麗人たちの認識していた王系を「正しく反映した」とする以上、『広開土王碑』の王系を遵守すべきである。そのため、『広開土王碑』の「一七世孫」は、始祖・鄒牟王からではなく、『広開土王碑』にみえる第三代・大朱留王（＝太武神王）から数え始めて広開土王を「第一七代の王」として理解し、それならば麗紀の王系とも合致し、麗紀の王系は『広開土王碑』建立当時、すなわち5世紀初にはほぼ備わっていたとする見解が古くから提示される一方で、そもそも『広開土王碑』建立時の5世紀初の高句麗王系は、麗紀のそれとは相違しており、その後の高句麗の加上過程を経て、麗紀の王系が成立したとする見解も提示されていて軽視できない。このように麗紀の王系に関しては、見解の相違点も少なく、いまだ定論に達しているとは言い難い状況である。

そこで、高句麗史研究におけるこの問題の重要性を鑑み、高句麗史解明のための基礎的作業の一つとして、改めて既存の研究を批判的に検証しつつ、4世紀における高句麗王系の形成過程を討究し、美川王を強く意識しつつ、それを過去に投影する形で始祖・朱蒙や集安遷都以後の王系の最初の王である国祖王（大祖大王）が整備されたという、報告者なりの試論を提示し、高句麗の史的展開過程を解明する上での端緒にしたいとおもう。

2. ソウルにおける村祭り（マウル・クッ）の現況と 日韓比較研究の可能性

名古屋大学 浮葉正親

韓国の巫俗（シャーマニズム）については、植民地時代から現在に至るまで多くの研究が蓄積されてきた。しかし、戦後の日本人研究者の調査は全羅南道（とりわけ珍島）や済州島が多く、研究の関心も宗教的職能者であるムーダンの研究に偏りがちであった。

発表者は、2003年から2004年にかけて、ソウルに長期滞在する機会を得た。その際、ソウルには多くの村祭り（マウル・クッ）が残っていることを知り、継続して調査を続けている。ソウルの巫俗に詳しい洪泰漢によれば、ソウル市内には123ヵ所の村祭りがあり（そのうち26ヵ所で巫俗が介在する）、その村祭りの系統は次の3つに分けられる（洪2011：22）という。

(イ) 都堂クッ：農業を中心とする村で山を中心に行われる。旧3月や10月に多い。

(ロ) 府君堂クッ：漢江流域の村で府君堂を中心に行われる。旧正月に多い。

(ハ) 山神祭：ソウル北部の農村に多く、儒式で行われることが多い。

本発表では、(ロ)の例として、龍山区漢南洞「クン漢江府君堂」と麻浦区倉前洞の「栗島（パムソム）府君堂」の村祭りを紹介する。万神（ソウル地方の女性ムーダンの敬称、降神巫）が儀礼を取り仕切るタイプの村祭りである。

村（マウル）では、事前に祭官（火主、所任、都家など）を決め、祭りの費用を徴収して供物を調達し、万神たちを迎える。万神たちは祭場から不浄を祓い、神霊を呼び寄せ、歌舞音曲によって神霊や村人を楽しませる。山神、將軍、仏事、大監、軍雄、倡夫など、様々な神霊が呼び寄せられ、万神の口から神託（コンス）が伝えられる。

ここで紹介するソウルの村祭りを日本の村祭りとは比べると、次のような特徴が浮かび上がってくる。①芸能は専門家（ムーダン）がやる。②神託が多い。③神託にはお金を払う。このような特徴は、折口信夫が「春來る鬼」等で示した「ほかいびと」の姿を想起させる。また、注連縄の使用や不浄の禁忌、神迎えから神送りに至る祭りの基本的な構造など、韓国の村祭りには日本との類似点も多い。その類似点については、秋葉隆が『朝鮮民俗誌』で指摘して以来、まったく顧みられていない。これまでのシャーマニズム研究の視点ではなく、比較民俗学的な視点からソウルの村祭り（マウル・クッ）を捉え直してみる必要性を感じている。

(参考文献)

秋葉隆（1980）『朝鮮民俗誌』名著出版

浮葉正親（2015）「異人論から見た韓国の巫俗—ソウルの村祭りを中心に」山泰幸・小松和彦編『異人論とは何か ストレンジャーの時代を生きる』ミネルヴァ書房

洪泰漢（2011）『ソウルの村祭り』民俗苑（韓国語）

3. 海峡都市・下関市における在日コリアンの生活世界

天理大学 魯ゼウオン

海峡都市・下関市は、海峡を挟んで韓国に近いという地理的特性ゆえに、戦前から戦後、現在にいたるまで、多くの在日コリアンが定着し、「トンネ」（韓国語でまちの意味）というコリアンタウンを形成してきた。下関市の韓国・朝鮮籍人口は1950年7,231人、1960年6,791人、1970年5,275人、1980年5,469人となっており、人口5千人台を維持してきた。その後、1990年5,014人、2000年3,892人、2010年2,682人、2015年2,234へと減少の一途をたどっている。本報告は、1945年から2019年現在にかけて、下関市の在日コリアンの生活世界を、1)「トンネ」という居住地域、2)韓国との交流拠点、3)地域参加という3つとの関連で検証する。

1) 下関市の「トンネ」として、①トンクル・トンネ、②下関駅近くの商業地域、③下関港と下関駅間の地域の3つがあげられる。トンクル・トンネには多くの在日コリアンが暮らしていたが、1970年代から若手の転出がみられ、現在高年層が残っている。一方、商業地域と下関港と下関駅間の地域は、韓国との交流拠点に特化していき、韓国からのポッタリチャンサ（行商人）を含め、2000年以後、観光や日本食を目的とする韓国人が行き来するようになった。

2) 下関市の在日コリアンは、韓国との交流拠点という特徴を活かし、下関市に拠点を置く日韓親善団体と交流しつつ、多様な民族組織を形成している。まず在日本大韓国民団山口県地方本部は、戦後、韓国との国交がない時から日韓交流のパイプ役を担ってきた。1990年代以後になると、地域参加を模索しつつ、帰化者を含む形で組織を維持している。在日1世が形成した光明寺と在日大韓基督教下関教会という宗教施設が存在している。下関教会にはニューカマー韓国人が集っている。朝鮮人の運動によって設立された山口朝鮮初中級学校は、近年韓国の市民団体と交流し始めている。

3) 下関市の在日コリアンは、グリーンモール商店街という下関駅近くの商店街と下関市が実施する「リトル釜山フェスタ」に参加している。グリーンモール商店街は2001年に韓国色を取り入れたフェスタをスタートさせ、2019年の時点で19年が経過している。下関市の在日コリアンはフェスタを地域参加・文化交流の場と捉え、参加している。山口朝鮮初中級学校は伝統音楽を披露している。若手の在日コリアンは実行委員として参加している。2019年、釜山市は「新朝鮮通信使事業」の一環として、伝統演技団体を派遣した。以上により、フェスタは、在日コリアンの伝統文化ならびに日韓親善団体の交流活動、釜山市との友好交流が地域活性化の資源として有効であることを示しているといえよう。

4. 韓国のマウルづくりとローカル・コミュニティの再編成 ——南原地域の事例から——

東京大学 本 田 洋

本発表の目的は、「マウルづくり」の過程でローカル・コミュニティがどのように再編成されつつあるのかについて、韓国南西内陸部南原地域の事例に即して検討することにある。

「マウルづくり」(마을 만들기)とは、近年、韓国の地域社会で活発に試みられるようになった民間のある種の諸活動とそれへの行政的施策を包括的に指す用語である。この用語の系譜をたどると、少なくとも一つの源流は日本の「まちづくり」に行き着く。「マウル」と翻訳された「まち」は、ここでは住民が主体的に作り上げる物質的／非物質的生活環境を意味する。そして「マウルづくり」(まちづくり)とは、地域住民がこのような生活環境を自ら参与的・創造(想像)的にデザインする(計画し実践する)活動を指す。

この用語は1990年代後半以降、主に社会・市民運動の領域で受容され、民間での「マウルづくり」運動のネットワーク化が進む過程で、各地で散発的に試みられていた小規模な区域・集団を基盤とする諸活動や、この運動に先立つ提案的共同体運動の先駆的な事例が、その範疇に含められていった。一方、行政の領域では、2000年代中盤以降、住民参与型の地域開発戦略への傾きが強まるとともに、このような手法への関心も高まっていった。また2010年代初頭以降の新たな動向として、地方自治団体が直接事業を執行するのではなく、条例に基づき直営あるいは民間への委託形式で中間支援組織を設立し、民間の専門家・活動家を抜擢してより専門的かつ体系的に支援事業を推進するようになった点を挙げられる。

近年、地域社会、あるいは日常的な生活空間におけるマウルづくりの現場は、社会・市民運動との連携、中央・地方行政の介入、さらには市場原理・経営的手法の導入により、多様で異種混雑的な諸行為主体(ステーク・ホルダー)が交錯する場となっている。これにともない、ローカル・コミュニティ、すなわちある種の実践感覚としてのローカリティとコミュニティ感覚、ならびに再領域化された実体的な関係性としての多様なコミュニティが、新たに生成あるいは再構築されつつあると考えられる。

本発表で事例として取り上げる南原地域(行政上は全羅北道南原市)は、行政主導の「マウルづくり」政策においては後発地域として位置づけられる。関連条例の制定は2017年まで持ち越され、市直営の中間支援組織(Kセンター)が創設されたのも翌年の2月であった。しかしその後の活動の展開には目覚ましいものがある。この発表では、南原地域におけるマウルづくり活動の実態について、2018年8月の予備調査と2019年5月～10月・12月の現地調査の成果に基づき、以下の3点に焦点を合わせて論ずる。

- ①民間主導の「マウルづくり」関連活動の蓄積。
- ②Kセンターの教育・支援プログラムと地域住民の参与。
- ③Kセンターの諸事業と参加者の諸活動を触媒とするローカル・コミュニティの再編成。